

【編集後記】

日本で40年近く昔にはやった「シティ・ポップ」と呼ばれる音楽が、ここ数年、日本のみならず海外で大人気になっているようです。

「シティ・ポップ」の定義は少し曖昧ですが、おおむね「1970年代から80年代にかけて日本で流行し、欧米の音楽から影響を受けた、都会的で洗練されたポップス」ということのようにです。

代表的なアーティストとしては、大瀧詠一、山下達郎、吉田美奈子、荒井由実、竹内まりや、大貫妙子、南佳孝といったところが挙げられています。年配の方々にとっては懐かしいアーティストばかりではないでしょうか（興味のない読者の方々、ゴメンナサイ）。

かくいう筆者も、この辺の音楽にどっぷりはまった世代なので感慨深いものがあります。自分が若い頃、熱中して聴いていた音楽が、こうした形で再び脚光を浴びるのは不思議な感じもしますが、自分の音楽志向が評価されたようで(?)勝手に喜んでます。

面白いのは、往年のヒット曲だけでなく、シングルになっていないアルバムの中の一曲が、にわかに注目を集めている点です。

例えば、竹内まりやの「プラスチック・ラブ」(1984年)は、「VARIETY」というアルバムの一曲で、個人的にはお気に入りでしたが、ファンキーで和のテイストがあまりない、玄人好みの曲という印象でした。

ところが昨年、この曲の音源がYouTubeにアップされると、6千万回以上も世界中の音楽ファンによって再生され、シティ・ポップブームを象徴するような楽曲になったとのこと。世界中の人たちが先入観にとらわれず、自分たちの感性で好きな曲を発掘し、それが世界中に広まって一大ブームになるというのは画期的なことだと思います。

やはり、YouTubeやTikTokといった動画配信サイトの影響力は絶大ですね。また、シティ・ポップブームの背景には、SpotifyやAmazon Musicといったサブスク(サブスクリプション)音楽配信サービスの普及も一役買っているようです。例えば、動画配信サイトで気になった音楽をサブスクで検索し、さらにサイトから勧められる楽曲を聴いてみて、自分のお気に入りの曲を見つけるというような行動をとる方が多いとも聞いています。デジタル技術の進化が、音楽における国と世代の壁を取っ払ったともいえますね。

SNSも使い方を間違えると炎上して、たびたび社会問題を引き起こしたりしていますが、文化の継承という点では少なからず貢献しているのかもしれない。

(sage)

電機

2022年6月号 No.826

2022年6月29日発行

頒価550円(本体500円)

発行

JEMA 一般社団法人日本電機工業会
THE JAPAN ELECTRICAL MANUFACTURERS' ASSOCIATION

編集兼発行人 提嶋 毅



〈表紙の言葉〉

誌名のローマ字表記である“DENKI”をメインビジュアルとすることで、電機産業の発展が社会や人々に貢献し続けた歴史を振り返るとともに、より安心で便利な未来のために、これからもますます進化し続けたい、という思いを表現しています。

〈誌面の文字例〉



本誌で使用する文字は、読みやすさを求め、多くの人々が利用可能なデザインをコンセプトとした「ユニバーサルデザインフォント」を基本にしています。

当機関誌『電機』では、編集に当たり表記の統一を図っておりますが、一部記事につきましては、筆者様のご意向を尊重させていただきます。

(JEMA会員については会費中に本誌頒価が含まれています) [2022 © 禁無断転載]

印刷所

港北出版印刷株式会社 〒150-0002 東京都渋谷区渋谷2-7-7

- 本部 〒102-0082 東京都千代田区一番町17番地4 電機工業会館
電話 03-3556-5882 ファクシミリ 03-3556-5892 本誌編集部
- 大阪支部 〒530-0004 大阪市北区堂島浜2-1-25 中央電気倶楽部4階
電話 06-6344-1061 ファクシミリ 06-6344-1837
- 名古屋支部 〒460-0008 名古屋市中区栄2-10-19 名古屋商工会議所ビル6階
電話 052-231-5211 ファクシミリ 052-231-5610
- 九州支部 〒810-0004 福岡市中央区渡辺通2-1-82 電気ビル北館10階
電話 092-761-4778 ファクシミリ 092-751-2094



- 東京メトロ半蔵門線 半蔵門駅(Z05)下車 4番出口より徒歩3分
- 東京メトロ有楽町線 麴町駅(Y15)下車 3番出口より徒歩7分